

坂口安吾論

——戦前／戦後作品にみる断絶と連続

文化創造専攻 国文学専修

二二〇〇一AJM 小 辰 柾 貴

修士論文要旨

本論文は、坂口安吾の社会的劣位にある存在の可能性を描いた作品群を対象とし、それらに通底する思想を明らかにすることを試みるものである。そこで取り上げたのは、戦前の「ファルス作品」と呼ばれる作品群と、戦後の「白痴」および「青鬼の禪を洗う女」であった。第一章では、初期のファルス作品から戦後作品にまで通底するものについて検討を行った。安吾のファルス評論「ピエロ伝道者」「FARCEに就て」の両作品には、純粹な笑いに対する言及のズレが見られる一方で、「素直さ」や「人間のありのまま」を評価しようとする点においては共通していた。こうした「人間のありのまま」や「素直さ」を評価する言及は戦後の「墮落論」にも見られる。その後安吾作品に引き継がれていく思想が、すでにファルス作品群のなかで芽吹いていたのである。

第二章では、戦後に発表された「白痴」を対象とした。「人間」が見出されながらも「豚」と表象されることが問題視されてきた「白痴」だが、動物として表象されることがはらむ問題をアニマル・スタディーズの視点から分析した。「白痴」の物語世界では、市井の人々はしばしば《動物》と同等な存在として並置される。そのような世界において、空襲以前には「虫」と表象されていた白痴の女が「豚」へと変化することは、単なる卑下ではなく、人間により近い存在に位置づけられたともいえる。「素直さ」を評価する同時代の安吾の言説を踏まえるならば、実は白痴の女こそが「素直さ」をもった人間らしい存在であったといえるだろう。「白痴」は白痴の女を通して、新たな人間性の可能性を描き出したテクストといえる。

第三章では、「青鬼の禪を洗う女」を対象とした。サチ子は特異な存在であり、同時代の規範から逸脱していく存在であった。しかし、闇市や性売買など、生きるための規範の乗り越えが横行する戦後社会においては、サチ子のような生は実は適格的だったともいえる。また、サチ子は物語の進行に伴って思考しなくなっていく。それは一見すると、「人間」であることの放棄のようにもみえる。だが、サチ子が提示するのは、「人間」らしくないからこそ可能となる、別の生き方を獲得していく姿であった。それは既存の規範が機能し得なくなつた戦後社会に示された、新たな「人間性」だったのでないか。

以上の分析を通して、安吾作品にあらわれる社会的劣位にある存在には、同時代に求められた新たな人間性の象徴としての役割が与えら

れてきたことが明らかとなった。しかし、社会的劣位にある存在に、「素直」で「規範」に縛られない新たな人間性を見出そうとする安吾のまなざしにはられた、ある種の暴力性も見逃してはならないだろう。そうした人々が実際に抱えていた複雑さを見ず、「素直さ」を描ける素材として、その劣位を利用しているとも考えられるからだ。本論で扱ってきた安吾の作品群は、社会的劣位の存在について、その可能性や諸問題を明らかにすることの重要性とともに、《人間》とされる存在と劣位に置かれた存在が、いかにして分割されるかを考えるための手がかりを与えてくれるものであったといえる。